



- 日時：平成30年3月4日
- 会場：森ノ宮医療学園専門学校

【講演2】「難聴・眩暈の鍼灸治療」

森ノ宮医療大学 保健医療学部鍼灸学科教授
仲西宏元先生

鍼灸院に〔耳が聞こえにくい〕ことを主訴として来院される患者さんの疾患である、難聴・耳鳴・めまいについて、医療的説明をはじめ、鍼灸治療の実際など鍼灸師にとって、大変役立つ講演をしていただきました。

— * — * — * — * —

難聴については、外耳・中耳・内耳のどの部位に病変が在るかによって、伝音性難聴・感音性難聴・混合性難聴に分類される。

難聴を訴える疾患としては、耳垢栓塞・外耳道異物などの外耳疾患、中耳炎などの中耳疾患、メニエール病・突発性難聴などの内耳疾患、聴神経腫瘍などの聴神経疾患が在る。

耳鳴りについては、外界からの音刺激なくして自覚的に感じられる音感覚（雑音）で患者のみに聞こえる一種の聴覚異常で、耳周囲で感じるものである。

分類としては、頭蓋内耳鳴（頭鳴）と耳性耳鳴（耳の周囲で音がする）がある。

耳性耳鳴には、真性耳鳴または自覚的耳鳴（他人には聞こえないもの）と仮性耳鳴または他覚的耳鳴（他人にも同じ音が聞こえる）がある。自覚的耳鳴には、耳疾患に伴う耳鳴として外耳性耳鳴、中耳性耳鳴、内耳性耳鳴、聴神経性耳鳴がある。

めまいには自覚的なめまい（問診の対象）と他覚的な平衡障害（検査の対象）がある。

めまいの分類として、回転性めまいと非回転性めまい（ふらふらする）がある。問診では、回転感や浮動感などを伴うか、発汗・嘔吐などの自律神経症状はどうか、耳鳴・難聴など聴覚症状はどうか、聴覚以外の神経症状はどうか、発作性で反復・持続性はどうかなど確認が重要である。

めまいの激しいものは内耳の原因が多く急激病変で生じ、軽いものは脳幹・小脳など中枢系に多い。前庭性のめまいには、末梢性（内耳）で原因が比較的明らかな（帯状疱疹など）もの、原因が明らかでない（メニエール病など）もの、中枢性（脳幹・小脳）の（脳腫瘍など）がある。

鍼灸臨床で遭遇する疾患には、難聴・耳鳴・めまいなどを主訴とする、メニエール病や突発性難聴などがある。

メニエール病は原因不明で症状としては、一側性の難聴・耳鳴と自発性・発作性で反復性のめまい発作がある。耳閉感、音が響く、音が割れて聞こえにくいなどの耳症状がある。嘔吐、呼吸の乱れなどの自律神経症状をとともなうことがある。また診断では回転性めまい発作を反復すること、耳鳴・難聴などの蝸牛症状が反復することの確認が大事である。突発性難聴も原因不明で症状としては、突然に難聴が発症する。

自発性・発作性で単発のめまいを随伴することがある。めまいを伴わない症例では適切な治療で70～80%は治癒するが、めまいを伴う症例では30～40%の治癒率と低い。また診断では突然難聴が発症する、原因が不明である、随伴症状の特徴（耳鳴と難聴の発症、めまいの出現）を伴わないことの確認が大事である。治療にあたっては早期の治療開始（発症から10日以内）が重要である。

●難聴・耳鳴・めまいの東洋医学的考察

耳の機能は多くの臓腑・経絡と関係し、生体の気血津液の循環・代謝とも密接に関与している。耳の病変は、耳の機能を支配するとともに、耳に影響を及ぼす臓腑・経絡の失調に反映する。

◆メニエール病の中医弁証

肝陽亢進：情志の失調によって肝が損傷されることによって、肝陰が不足し肝陽が上昇し眩暈が出現する。

・痰濁：飲食不節や疲労などで脾胃が損傷することで、脾胃の運化機能が低下し痰湿が生じ中焦に停滯することで眩暈が出現する。

・気血両虚：脾胃が虚すため気血の生成が悪くなり気血・血虚になり眩暈が出現する。

・腎精虚損：腎精が先天的・後天的に不足することにより、腎陽虚はめまい・耳鳴などが出現し、腎陰虚は手足のほてり・のぼせなどが出現する。

局所治療としては、身体の平衡機能の異常を改善するための治療を行う。

◆突発性難聴の中医弁証

実証：六淫の邪気あるいは内蔵機能の失調によって、火鬱・痰凝・気滯などで耳に影響を及ぼす。

虚証：心・脾・腎などの臓の虚損によって引き起こされる。

実証には、風熱犯肺、肝火上炎、痰火壅結、気滯血瘀が、虚証には脾胃虚弱、腎精虚損になる。

局所治療としては、耳周辺の経穴（翳風・耳門・聴宮・聴会）に対して刺鍼を行うことで、耳鳴の改善に効果が見られる。

◆メニエール病や突発性難聴などのめまい、難聴、耳鳴の鍼灸治療のポイントとしては、

- 末梢性か中枢性かを鑑別する
- 弁証に準じて配穴する
- 後頸部の筋緊張を触診する
- 後頸部の緊張緩和を目的に鍼灸治療を行う
- 患者へのインフォームドコンセントを行う、などである。
-

鍼灸師にとっては、出来る検査が限られているため、問診でしっかり患者の症状を把握した上で、適切な治療をすることで症状の改善に繋げていくことの大切さを学ぶ機会となりました。

（研修委員 中村 隆）

